

---

# 反転・遊戯 - リバース・ゲーム - 5 (仮) 上

神代家家長

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

反転・遊戯 - リバース・ゲーム - 5 (仮) 上

### 【Nコード】

N6911J

### 【作者名】

神代家家長

### 【あらすじ】

反転・遊戯 - リバース・ゲーム - 4 (仮) の続き。

## 第一章（前書き）

本当なら第五巻として全て纏めてしまうつもりだったのですが予想よりもずつと長くなってしまったので上下巻に分けて投稿することになってしまいました。

## 第一章

「・・・以上で最近の能力者組織についての状況報告です」

「ふむ。どの組織も活発になってきているようだが特に、なんと言ったかな、最近になって現れた組織」

私の報告に対して最高責任者である『彼』は椅子に背を預けながら問うてきた。

「『アポカリプス 黙示録』ですか？」

「そうそう、それだ。噂のリバースが所属している組織だったかな？」

「ええ。そのようですね」

アポカリプス  
黙示録 最近になって唐突に出現し急速に勢力を伸ばし始めた少人数で構成された能力者組織。行動に一貫性がなかった為、当初は固定の名前を記されていなかったが、ある法則性が見受けられるからは他の能力者組織からはそのような名前と呼ばれるようになった。

彼らの行動に見られるある法則 即ち『悪を暴き、正義をなす』組織である為に『隠れた悪を見つけ暴露する』という意味でアポカリプスと名付けられた。

「能力者が正義の味方を名乗るとは笑わせてくれる」

「いえ。組織の名前は彼らの行動理念から我々が勝手に命名した物であって彼らが自ら正義を語っている訳ではありません」

「同じ事だろう？現に彼らの行動は正義の味方として認識されているのだから」

「それはそうですが・・・」

正義を名乗る事と正義を成す事。似ているようで実際には天と地ほどの差がある。これは私の持論になるが正義とは『志す』べき物であって『振りかざす』物ではない。本当に正義を志す物であるな

ら決して正義を自ら名乗ったりはしないものだ。

その意味でアホカリブス黙示録の者達は真の正義組織と言えるのかもしいれない。「問題なのは彼らの理念などではなく彼らが私にとって有益か否かという事だ。如何に優秀な能力者が集まっているといってもこの規模だ。邪魔なら早々に叩き潰すべきだろう」

「はい。そう思って組織の事を調べてみたのですが・・・」  
「が？」

「尻尾を掴ませません。少人数という事もあるのですがかなり優秀な情報操作員がいるらしく彼らの拠点は勿論、指導者の特定にも至っております」

「リバー스가指導者ではないのかね？」

「私も当初はそう思ったのですが、それにしても彼女は表に出すぎています。まるで名前の通っている彼女を隠れ蓑にするかのように」

「ではリバー스를捕らえて情報を吐かせれば良いのではないかね？」

「お言葉ですが・・・」

「？」

「リバー스는一級の能力者です。そして残念ながら我が組織は規模こそ巨大な物ですが抱える能力者の質という点においては彼らの組織の足元にも及ばないでしょう。結論として単独で自由に動き回る一級能力者を捕らえる事は非常に困難です」

私はリバー스를過大評価するつもりもないが過小評価するつもりもない。現在の我が組織に所属する能力者程度ではリバー스를捕らえる事は不可能だと見ていた。

「ならばどうするというのがね？実際に僅かといえど私の組織に被害が出ている以上、放置するという訳にはいかんのだよ」

「分かっています」

別に貴方の個人的な組織ではないでしょう。心の中でそう思いつつも私は頭の中で綿密に練りこんできた対リバーズ用のプランを公開。

「・・・」

しようと思ったところで電話のメロディが鳴り響く。所持している携帯電話ではなく机に固定されている社内電話が鳴り出した。

「・・・出たまえ」

「はい」

貴方の電話が鳴っているのに何で私が出なくちゃいけないのよ！と心の中で罵りながらも表情には出さずに受話器を取り上げた。

「はい、こちら・・・」

『はあ〜い』

「・・・」

私の受け答えが終わる前に頭のネジが緩んでいそうな女の声が受話器から響いてきて思わず言葉を中断して黙り込む。

『ふふん。行き成り黙り込むなんて、ちよつと非常時に対する対応力が低いんじゃないのかね、あんた』

「どなたでしたかしら？」

『勝手に人の噂話までしておいて、いざ本人が現れたらそれ？』

「！」

私は受話器を手で押さえて慌てて周囲を見渡す。だが勿論、周囲には誰も居ない。最高責任者たる上司を除いて、だが。

「誰かね？」

「恐らくですが件のリバーズかと」

「何？」

どうしてリバーズがこの番号、しかも社内用の内線電話として設置されていた電話に繋いで来たのかは分からない。しかし、これは余りにも予想外の展開だ。

「如何致しましょう？」

「ふん。好都合ではないか。話しつつでに情報を目一杯引き出したまえ」

「・・・やってみます」

こちらの情報が漏れているという危惧を全く感じ取らないまま勝手な事を言う彼に内心で罵りながら私は再び受話器を耳に当てて会

話を再開する。

「確認しますが・・・」

『あんたの所の上司、随分無能だね』

「・・・」

『あんたはそこそ優秀そつなのの上を選べないって言うのは同情するよ』

「それはどうも。それより確認しますが・・・」

『ああ。アタシがリバーさ。今更だが一応確定事項として認識しておきな』

「・・・」

不味い。電話が掛かってきた時から既に不利な位置に立たされている事は分かっていたが、これは予想以上に不味い事態だ。そもそも彼女　リバーは私が電話を受ける前から私達の会話を聞いていた節がある事、更に受話器を手で押さえて音を遮断していたのも関わらずこちら側の情報が入っているという事は、何らかの手段でこちらの情報を盗聴しているという事。

そして更に不味いのが私の思考よりも明らかに彼女の思考の方が一歩早いという事だ。

頭の回転には自信があつたが、相手はその私よりも更に一歩先を行く相手だという事が事態の悪さを表していた。

「それで・・・」

『用件は一つ。宣戦布告って奴さね』

思考を先読みされる事にはまだ苛立つが、それにも段々慣れてきた。それにしても宣戦布告？

『アタシらの組織にとってあんた達の組織ははっきり言って邪魔なのよ。だから潰させて貰う事にしたって訳』

「正気ですか？いくら貴女方の組織が優秀な人員を取り揃えていると言つても、こちらの組織とは規模が違い過ぎる。個人で大国に戦争を仕掛けるようなものですよ？」

『なぐに。セオリー通りに大軍を相手にする方法をとれば良いだけ

「さ」

「セオリー？」

『何だ、知らないのかい？少数で大軍を相手にする時の鉄則を』

「まさか・・・」

『そう。少数で大軍を相手にする時は・・・先ず真つ先に頭を潰す！』

「それこそ無謀です！ここは組織の最重要拠点、言い換えれば護り一番堅い所なのですよ？そこをどうやって攻めるといいます？」

『あんたも大概頭が固いねえ。そんなこつちや優秀とは認めてやれないね』

「どういう意味で？」

『アタシがその電話を鳴らした事でそつちの情報を受け取れる位置に居る事は理解しているんだらう？』

「え、ええ。しかし、それとこれとは話が別です。貴方がどれほど情報操作に優れているともこの部屋まで侵入する事は・・・」

『何でわざわざ侵入なんて面倒な事しなくちゃいけないのよ』

「え？」

『アタシの情報を得ているんだつたらアタシの攻撃手段くらいは分かるだらう？』

「！」

私が驚愕して振り向くと同時に葉巻に火をつけようとしていた彼の目の前を『何か』が通り過ぎていく。

『煙草は嫌いなんでね。消させて貰ったよ』

「リバースエテラ反転滑走。何処から！？」

『馬鹿な事、聞いてくるんじゃないよ。能力の特性を考えれば一目瞭然だらう？』

「・・・東のビル！」

『「」名答』

「所長！今すぐ東のビルに追跡班を送る許可を！」

「あ、ああ」

葉巻を目の前で千切られて呆然としていた所長がかくかくと首を縦に振る。

『ふふん。』所長』ね。予想はしていたがやっぱり能力者研究『所』だった訳だ』

「！」

しまった。リバーズに情報を先出しされた為に慌ててしまい、こちらの情報を引き出されてしまった。初めからこれが狙いだったのか。

「やってくれたわね」

『あなたが勝手に自爆したんだろ？人のせいにするなよ』

「く！」

そう。このビルは能力者研究所として機能していて、そして私はこのビルの管理責任者である彼の秘書。

『それより連絡しなくていいのかい？その眼鏡の優男、自分から動く気は全くないみたいだけど？』

「大きなお世話よ！」

私は叫びながらも机に設置された緊急用の連絡スイッチを露出させ。

「きゃっ！」

目の前でそのスイッチが粉々に砕け散る。

『そっちの状況が分かって、そっちに介入する手段もあるって言うのに連絡される様を黙って見ているとでも思った訳？』

「く！」

悔しいが今のは私が迂闊だったと言う他ない。リバーズの言動から彼女の言葉に従って動いてしまったのだから。

『その悔しそうな顔を見ると一旦部屋から出るかしないと連絡が来ないのかね。緊急時の備えが甘いんじゃないかい？』

「・・・」

必死に内面を落ち着けようとする私を嘲笑うかのようにリバーズの言葉が私の耳に届く。混乱と激昂と焦りがブレンドされた今の心

境では何が正しい判断なのか導き出せない。

だから私は単純にリバーズとの会話を切り上げて受話器を下ろして連絡するという正常な判断を導けなかった。

結論から言えば私の組織した追跡班はリバーズの組織どころかりバーズ本人の尻尾すら掴めず帰還する羽目になった。

所長自身も煮え湯を飲まされたとあって私が批難される様な事はなかった物の、この事実は大いに私のプライドを傷つけた。だからなのだろう。

これ以降、私とリバーズの長い戦いの火蓋が切って落とされた。

まず私が最初にした事は、研究所の総力を吟味し最高の戦力を想定してリバーズにぶつける事だった。

私の頭脳をフル回転させ、考え得る全てのリバーズの行動を想定し、あらゆる情報を操作した にも拘らず。

「そんな」

私は負けなかった。けど勝てなかった。正確には私が想定したりバーズの行動範囲についてリバーズは現れなかった。綿密な罠を幾重にも張り巡らせて罠を張り続けたというのに結局最後までリバーズは現れる事無く上からの失望の目線を受けながら撤退を余儀なくされた。

はつきり言えば空振りさせられた。

私がここに罠を張っていると分かっていたから、ここを完全に無視した。無視された。私のプライドを掛けた一世代の大勝負を、その挑戦を、無視された。

結果として私は更にリバーズに『拘る』事になった。

それから幾度となく私はリバーズに対して画策し、行動を起こし

た。

それらは悉くりバースに察知された無駄に終わったが、ある時、何の偶然なのか、たったの一度だけだがリバースがこちらの罠に飛び込んできた。

「ついに追い詰めたわよ」

「やれやれ。あんたも毎度毎度大概しつこいねえ」

肩を竦めるリバースは意外な事に私の事を知っている風だった。

「貴方ともあるうものが、こんな罠に引っかかるなんて随分墮ちたものね」

「そうかい？毎回結構ギリギリだったんだけどね」

「え？」

「ま。今回はちょいとあんたが上手だったみたいだね。だが、ちょいと詰めが甘いよ」

「！」

油断したつもりはなかったが結局その場ではリバースを捕らえる事が出来ず逃げられてしまった。

でも。

「毎回何の苦労も無しに私の策が論破されていた訳じゃなかったのね」

それは私の行動にある一貫性を植え付けてしまった。

「まさか好敵手から直接お呼びが掛かるとはね」

「・・・」

幾度とないリバースとの勝負の末、私はリバースに対して個人的に呼び出しを行う事に成功していた。あくまでプライベートとしての呼び出しに彼女は応じてくれた。

「それで、用件は？」

「勝負がしたいの」

「勝負？」

「そう。貴方と私の一騎打ちの勝負を。勿論、能力者としての勝負

ではないわ」

「ふ〜ん。つまり、あんたがアタシを捕らえるか、アタシがあんたから逃げおおせるかの勝負をしたって事？」

「そうよ」

「それってあなたの仕事上、可能な事なのかい？随分個人的な感情で突っ走っているように思えるけど」

「構わないわ。私はあんたに勝たなければ一歩も先に進めない女になっちゃった」

「ふ〜ん」

リバーズは興味深そうに私の話を聞いていたが今一乗り気というほどではなかった。

「貴方はこう言いたいのでしょうか？この勝負自体は私の自己満足。貴方に対してのメリットがないと」

「そうだね。アタシも出来れば仕事上あんたとは顔を合わせない方が都合が良いしね」

「だから、その対価として情報を渡すわ」

「どういう意味だい？」

「私が所属する研究所の情報を私の知りうる限り全て貴方に譲渡する。その代わり貴方には私と徹底的に勝負をして貰うわ」

「本気かい？あんた、自分の所属している組織を裏切る事になるんだよ？」

「構わないわ。どうせ私に匹敵するような頭脳の持ち主なんて今の組織には居ないもの。バレなければどうという事はないわ」

「・・・少し時間を貰いたい。アタシ個人の一存では決めかねる」  
「構わないわ」

この日の会談は終わった。そして数日後、私の元へ個人的にリバーズから条件を飲むとの返信を受けた。

『こうなったからにはアタシも全力であんたから逃げ切ってみせるよ』との言伝をつけて。

それからのリバーズは今までと比べ物にならないほどに手強かった。

というより全くこっちに尻尾を掴ませなくなった。言葉通り全力で私から逃げ切るつもりなのだろう。

面白い。そうでなくては勝負の甲斐がないというものだ。

「意地悪ね」

「そうか？」

俺　リバーズは横目で睨みながら言ってくるテンペストに空を見上げながら答えた。

「意地悪じゃない。貴方に勝てる筈がないのに躍起になって勝負を挑んでくるんだから。健気過ぎて気の毒になってくるわ」

「本人が満足しているんだから別に良いだろ」

「それを含めて意地悪だと言っていいのよ」

テンペストは意外にしつこく詰め寄ってくる。

「エアーズが居る以上、彼女を媒介にすればあちらの組織の情報は粗方手に入ってしまうわ。その情報と彼女から提供された情報を照らし合わせれば彼女の作戦はこちらから丸見えになってしまう。じゃんけんで言えば相手の出す手以外の二つが分かっているんだから相手の手を100%予想しているような物よ。これじゃ絶対貴方に勝てる訳ないって気付いてないのに一生懸命になって、気の毒だわ」

テンペストの例え話のじゃんけんを例に出すと、俺の味方である情報のエキスパートのエアーズは相手組織のグー、チョキ、パーの全てを見る事が出来る。そして状況提供者である彼女はグーとパーを渡してくれる訳だ。結果として残ったチョキが彼女の手札。俺に對抗する為の作戦として隠蔽した部分こそが彼女の俺に対する罠なのだが、それがわかつている以上俺が彼女に負ける要素はない。素直にグーを出せば良いのだから。

「まあ、確かに俺は意地悪かもしれないが・・・」

「？」

「構って貰いたいなら素直にそう言えよ」

「！」

テンペストは真っ赤になって俯いてしまった。本当、可愛い奴。

ちなみに彼女　この場合、敵対組織の秘書さんの事　の行動は全て俺の想定どおりの事だ。一度彼女の罠にかかった事は無論、故意だった訳だが、あの時彼女に語った事が全て嘘という訳ではない。俺と彼女の間にそれほど差がある訳ではないというのも事実だ。今までは毎回俺自身が頭を絞って彼女の罠を回避していたし（だからこそテンペストが寂しがっていた）危なかった事も一度や二度ではない。

その危険を冒して俺が彼女と勝負していたのは、彼女の所属する組織が余りにも巨大だったからだ。余りにも巨大な組織だった為に以前彼女に言ったような手段　頭を潰しても余り意味がなかった。だからこそ彼女を挑発するような事をして彼女が俺に執着するように仕向けた。

結果として俺の組織は圧倒的な戦力の差を持たながらも負けずに戦い続ける手段を確立した訳だ。

彼女が俺に拘る限り、いつか彼女の所属する組織は潰える事になるだろう。

## 第二章

「新装備？」

色々な画策の末、俺の手を離れた作戦を適任者達に任せたので暇になった俺は組織のリーダーであるゴールドに呼び出されていた。「ええ。風切に開発して貰った装備を貴方にお渡ししようと思いついて」

「ふ〜ん」

ゴールドから受け取った物はピアスのような物と小型のイヤホンのようなものだった。

「一言で説明するなら、これは私とエアーズの能力をリンクさせた貴方の現在装備している眼鏡のような物です」

「お前の能力とリンクしているから距離に関わらず俺と連絡が取れる装備って事か？」

「私の方はそうですね」

そう言つてゴールドはピアスのような物を持ち上げる。

「こつちがエアーズの能力とリンクした装備か？」

「いいえ」

イヤホンを取り上げながら聞くがゴールドは首を横に振る。

「彼女の能力上リンクさせても意味の無い能力なので、そちらは普通のイヤホンです。ですから・・・」

ゴールドは少し勿体つけるように『それ』を俺の前に差し出す。「携帯端末？」

「リンクはさせていないので通常の電波通信になりますが、彼女の能力で得た情報をこちらの機器を通して貴方に直接送る手法です。

一応相互通信なのでよほど酷い電波妨害でもなければ通信出来る筈です」

「なるほどねえ」

要するにエアーズがこの携帯端末を完全にハッキングして、それを通してイヤホンで俺が情報を受け取るというプロセスな訳だ。

試しにイヤホンを右の耳に付けてみる。耳の裏に隠れるし保護色になっていたのでよほど注意深く観察されなければ髪に隠れて発見はされないように工夫されているらしい。

「こっちは良いけど、このピアスもどきはどうするんだ？」

「そのイヤホンと違って貴重な材料を使った高級品ですから。簡単に無くされない様にピアスにしたのです」

「・・・本気でピアスなのかよ」

正直、耳に穴を空けるのは勘弁して欲しいと思う。

「まあ、帰ってからテンペスト達に協力して貰うか」

「何を悠長な事を。バイブル！」

「うお!？」

行き成り現れたメイドに後ろから羽交い絞めにされて床に押さえ込まれる。

「ま、待て！後でちゃんとつけると言っているだろうが！」

「テストも兼ねるので、この場で付けて貰わなければ困るのです」

「だったらメイドに付ける！」

「彼女の分は今大急ぎで風切に作らせているわ。兎に角、主戦力たる貴方用の装備なのだから貴方につけて貰わなくては意味がないのよ」

「ちょ！だから待て〜！」

残念ながら、この場には止めてくれる人間も待つてくれる人間も居なかった。

『「愁傷様」』

眼鏡に写るテンペストの文字だけが虚しく流れていった。

「酷い目にあつた」

「正しい手順を取つたのだから別にそこまで痛くはなかつたでしょ

う？」

「精神的苦痛を味わった」

「はいはい」

愚痴を言う俺には構わずゴールドは目を瞑って少し集中している。数ヶ月の訓練の末、腕輪無しでも能力を行使出来るようになったとは聞いていたがどの程度使えるようになったかはまだ聞いていない。「ん〜。思ったよりリンクを特定させるのが面倒ね。少し時間が掛かりそうだわ」

「だったら家でつけても一緒だっただろうが」

「そこまで時間は掛けませんわ。ん。繋がったかしら？」

「お？」

ゴールドの能力がリンクされたのか俺の左耳に付けられたピアスが僅かながら振動する。そして。

『どっ？』

「目の前で言われても今一実感沸かないなあ〜」

恐らくピアスに俺に伝達する為の小型のスピーカーのような物が仕込んであるのだろうが目の前にゴールドが居るので余り意味がない。

「一応そのピアスから300メートル程度の距離の音を聞き取れる機能があるから、そのつもりで活用してください」

「と言っても別に俺が聞こえる訳じゃないんだろ？」

「ええ。私が聞いた音を貴方に直接伝える形になりますね」

本当にテンペストの眼鏡のゴールド版と言った所だ。

テンペストの眼鏡は周囲300メートル程度の視覚の情報を文字情報として俺に伝える機能があり、ゴールドのピアスは周囲300メートルの聴覚の情報を音声で俺に伝える機能がある訳だ。

「テンペストの場合は完全に密封された空間を探知する術はありませんが・・・」

「お前なら音が届く範囲なら探知可能って訳か」

「少なくとも、これまでよりは探索領域が広がるのは間違いないで

しょう」

「まあ、ありがたいと言えばありがたいかな」

「それに、これなら私が直接現場に赴かなくとも状況を知る事が出来ますしね」

「・・・それが一番の目的じゃないだろうな？」

ちよつとジト目で睨んでやったがゴールドはニコニコ微笑むだけで全く表情を変えやがらなかった。面の皮の厚い女だ。

。 ゴールドの自宅からの帰り道、右耳に雑音が入って一拍空いた後

『あ。やつと繋がりました。聞こえますか、アナタ？』

「お。ってこつちの声届くのか？」

『エアーズからの連絡だったのだが、そう言えばマイクは何処だ？専用のマイクはまだ出来ていないんです。だから今はテンペストに通訳をお願いしている現状です』

「・・・それでか」

さつきから眼鏡に入る情報が妙にトゲトゲしかったのだ。

「しかし、これだけの物を作ったのにマイクくらい間に合わせられなかったのか？」

『優先順位の違いと言うのもありますが製作側が少し凝った物を作ろうとして製作期限をオーバーしてしまったようです』

「なんだろりゃ」

俺は呆れながらも普通にエアーズとの会話を楽しんでいたのだが

『ごめんなさい。テンペストの目が怖いのでテスト通信を終わりますね』

「あ。やば」

思わず普通に話してしまったが俺の声はテンペストが訳していたのを忘れていた。

「はあ。帰りにケーキでも買っていくか」

『そんな事でご機嫌取るうったってそうは行かないわよ』

「それじゃエアーズにお土産買って行くかな」

『・・・モンブランが良い』

「へいへい」

ちなみに途中で連絡があって結局人数分のケーキを買って帰る羽目になった。

今現在、俺の家にはテンペスト、ミタマ、玉藻、セシリアの4人と同居している訳だが、そこにエアーズが入り込む余地は本来なら無かった。だからと言う訳ではないのだがエアーズは自力で俺の自宅の隣の部屋へ引っ越してきた。

「お前って金持ちだったんだなあ」

「アナタの所に空き部屋が無い事を一族に連絡したら支度金として用意してくれました」

「・・・」

そんな会話もあって今の所エアーズは隣の部屋から通い妻として俺の部屋に毎日訪れてはテンペストに煙たがられている訳である。

「専用の通信機器が出来れば部屋から追い出せると思ったのに、ゴルドの馬鹿」

「・・・」

まさかマイクの完成が遅かったのはエアーズの画策じゃないだろうな。なんとなく不安になってエアーズに視線を向けると鼻歌を歌いながら夕飯の支度をしている所だった。あの能天気振りを見ると疑いにくくなる。

数日後、エアーズのマイクが届いたので、そのテストを兼ねて散歩に出かける事にした。

「でも、これって眼鏡やピアスと違って結構かさばるな」

『私の扱う物が扱う物ですから、その程度は辛抱してください』

エアーズと通信する為の装備はマイクとイヤホンの他に携帯端末を常に持ち歩かなければいけないわけで、今まで手ぶら同然に歩き回っていた俺としては少し面倒だった。

「一応、専用のバックパックなんて作って貰ったけど、なんか違和感あるんだよなあ」

『慣れですよ、慣れ』

「へいへい」

エアーズに適当に返事をして俺は駅前の広場に設置してあるベンチに腰を下ろす。

「しかし、別にこんな所までこなくてもいつもの公園で良かったんじゃないか？」

『混雑している場所でのテストがしたかったもので』

現在、俺が居る所は自宅から少し離れた場所にある都心の駅だ。

いつもの公園と違って歩いてくるには少し面倒と思える距離だった。「お陰で玉藻には拗ねられるし、テンペストには睨まれるし、ミタマは泣き出すし、散々だったぞ」

『なんだか愚痴ばかりですね』

「妻に愚痴を言うのも夫の仕事なもんで」

『・・・』

黙りこむエアーズ。恐らく俺の言葉に照れて言葉が出ないのだろうが。

『相変わらずねえ、貴方。気障な台詞でもないのに、どうしてそんなに女を喜ばせるのかしら』

「やかまし」

失敗した。テンペストはまだしもゴールドも聞いていたんだった。

「あくあ。これからは3人の耳を気にしなくちゃいけないのかよ」

『テンペストは目だけだね』

「筒抜けって事じゃ一緒だろうが」

俺は肩を竦めて嘆息しながらベンチに背を預けてノンビリ体を伸

ばし。

「……半澤祐樹」

「……」

その名前を聞いて自分でも分からない理由で振り返ってしまった。振り返った先に居たのは長いストレートの黒髪を腰まで垂らした長身の美女。見覚えのない女だった。

「見覚えはない筈だが。」

「返事をしなさい。半澤祐樹」

明らかに俺に向かって『その名前』を呼んでいるらしかった。

「……誰？」

「貴方は自分の学校の生徒会長の顔も覚えていないの？」

「生徒……会長？」

俺は別に記憶力の悪い方じゃない。しかし、いくら探しても彼女が生徒会長であるという記憶どころか彼女と出会った記憶すら掘り起こせない。

「俺の記憶が確かなら、俺達は初対面じゃなかったか？」

「ええ。確かに会話するのは初めてね」

「……」

この女。良い度胸をしている。

「ともあれ私は貴方に話があるのよ。来なさい」

まるで俺がついてくるのが当たり前であるように歩き出す女。少々癪に触るが一方的に姿をくらませる段階の話じゃない。大人しくついていく事にした。

『半澤祐樹、ね。思ったより普通の名前だったのね』

「白々しい。さも今知った風な演技は止めるよ。水沢穂波」

『！』

半澤祐樹は俺の本名。そして水沢穂波はテンペストの本名だ。

「お前が俺と本部に所属していた時、お前は本部の端末にアクセスする権限を有していた。それなのに俺の個人情報調べないで居るなんて欠片も思っていなかったぞ」

「わ、私は兎も角、貴方に私の個人情報を得る機会なんてあったかしら？」

「さあな。企業秘密だよ」

「ふふ」

テンペストを煙に巻くと右耳にエアーズの含み笑いが届く。そう。つまり俺はエアーズを仲間に引き込んで最初に頼んだのがテンペストの個人情報流出だった訳だ。無論、そのときエアーズの個人情報も彼女自身の口から聞かせて貰ったが。

「でも彼女何者なのかしら？」

「さあな。本人の話を聞く限り俺の元の学校の生徒会長らしいが」

「本当かしら？」

「それも含めて本人に聞いてみれば良いだけの話だ」

俺は肩を竦めて自称生徒会長の後について喫茶店に入っていた。

「初めに自己紹介をさせて貰うわね。私は館社鏡美。さっきも言ったとおり貴方の学校の生徒会長よ」

「そりやどうも」

「私の自己紹介に対して自分も自己紹介しようとは思わないの？」

「少なくとも必要最低限の事を調べてきた相手に対しては、その必要は感じないね」

「・・・まあ、良いでしょう」

鏡美は尊大に頷くとウェイトレスを呼んで珈琲を注文した。

「貴方は何にする？」

「奢ってくれる訳？」

「常識の範囲なら、ね」

「・・・同じので良いや」

別に気後れした訳ではないが少し穏便に事を運ぶ事にした。

「さて。少し状況を説明させて貰うと貴方に会ったのは本当に偶然よ。唯、私の学校で行方不明になった生徒の顔を覚えていたので見かけたから声を掛けさせて貰った訳」

「ふうん」

「それで、今何処で何をしているのかしら？」

俺は珈琲を啜りながら女 鏡美の意外な程の頭脳明晰ぶりに少しだけ感心していた。今の質問、例えば俺が『言いたくない』とでも答えれば『つまり、貴方は自分の意思で行方をくらませているのね』とでも切り返してくるだろう。相手がどのように答えようと、そこから僅かでも答えを得て、それを切り口に相手の真相を掘り進める話術だ。

「これは内密の話として聞いて貰いたいんだが、実は・・・」

しかし、この場合相手が悪すぎる。

俺は鏡美に対して真実を大真面目に包み隠さずに話してやった。唯、画一的な面から俺の能力を現す名前『リバーズ』だけは伏せたが。

「だから俺は今、その組織の為に働いている。だから家にも学校にも戻る訳にはいかないんだ」

「・・・」

俺の大真面目で真剣な顔に対して生徒会長殿は目を細めてジトツと見返してきた。

「どうやら真面目に話をするつもりはないようね」

「待ってくれ！俺は本当に・・・」

「出ましよう。時間の無駄だわ」

という訳で喫茶店から出た俺達は一言一言だけ話して直ぐ別れて帰路に着く事になった。

『感心しませんね。煙に巻くならあれほど真実を話す必要はなかったではありませんか』

「分かってないな、お前」

俺は少し批難してきたゴールドに笑って返す。

「あの女なら俺がどんな言葉でどんな話しても、そこから裏を探ろうとしたらだろうが、さっきの話は例外なんだよ」

『どつという意味で？』

「だって、さっきの話は全部正真正銘の真実じゃん。そこに裏なんである訳がない。あの女は俺の話から裏を探ろうって気はあっても話の内容になんて興味がなかったのさ。だから話の内容が真実だろうとでつち上げだろうとあの女からしてみればどつちでも良かったのさ。というか多分俺の話なんて右から左だったろうから内容を覚えてるかどうかも怪しいな」

『・・・』

「それでも俺が自信無げの態度で話せば少しは興味を持ったかもしれないが、俺は大真面目に話してやったからな。俺の話には興味がない、裏も取れない。あの女からすれば至極退屈な時間だったろうな」

『貴方つて、本当に悪魔みたいに悪知恵が働くわね』

「失礼な」

『そつよね。リバーズつて必要なら悪魔ですら騙してみせるくらい悪知恵が働くもんね』

『・・・』

とりあえず、この話題では俺の味方は居ないらしい。

『でも良かったのですか？あの子、貴方の行動範囲を把握されてしまった気がするけど』

「大丈夫だって。後一回だけ会えば俺に興味なくすから」

『？』

一同は分からないという風に首を傾げているらしかった。

## 館社鏡美

それに気付いたのは気分を害して自宅へ帰り着き、携帯電話を充電しようとした時だった。

「・・・連絡先聞いてないわ」

半澤祐樹。学園で行方不明扱いの生徒で現在休学中。在学中は邂

逅した事はなかったが行方不明者という事で顔だけは覚えて暇がある時は街中で目で探す程度はしてきた。

今日始めて出会って話をして、一気に興味が失せた。

そう思っていたのだが、ひよつとしたら今日のは私に興味を失せさせる為の芝居か何かだったのだろうか？彼を発見したのは偶然だし、駅前から喫茶店に入るまでに短時間で私を煙に巻ける策を綿密に練られたとは思えないのだが、連絡先を聞き忘れた以上、それを含めて次に会った時に確かめる必要があるだろう。

二度目の邂逅は意外に早く訪れた。

半澤祐樹は私が偶然入った公園のベンチに座って日向ぼっこをしていて、私が近寄って声を掛けるまでお茶を啜りながらぼつとしていた。

「なんか用？」

「連絡先を聞き忘れていたの。住所と電話番号、教えて貰えるかしら？」

「あ〜」

渋ると思ったが彼は意外にも素直に住所と電話番号を教えてください。拍子抜けだ。

「意外に近いのね」

「あ〜。あそこに見えるマンションだよ。なんだったら寄って行く？」

「・・・遠慮しておくわ」

自分から誘ったという事は何もやましい事がない証拠。適当に指差しているという可能性もあったが、それなら私を誘ったりはしないだろう。

電話も掛けてみたけど彼の携帯電話はしっかりと着信音を鳴らしていた。

住所も電話番号も確保した。これでいつでも用があれば連絡出来る訳だ。

『良かったの？』

「何が？」

尋ねてきたテンペストに欠伸をしながら答える。

『住所も電話番号も本当の事教えちゃって。もし何かあったら面倒な事になるわよ』

「全然問題ないって。あの女は俺の住所と電話番号を手に入れた事で安心したからな」

『？』

「安心して、それ以上追求しようって好奇心が欠如したんだよ。正確にはいつでも調べられるっていう安心感が俺に対する優先順位を下げたんだな。よっぽど暇にならない限り俺の事なんて思い出さないだろうし、あの女はそうそう暇な立場に居ないだろう」

『でも、もし電話してきたら？番号変えたほうが良いんじゃない？』

「それをやったら逆に怪しまれるって。電話が掛かってきたら素直に出りや良いんだよ。それで世間話でもすれば勝手に勝手にあっちから切ってくれる」

『でも仕事中に掛かってきたらどうするの？』

「阿呆か。仕事中に電源切るのは当たり前だろうが」

『・・・』

「ま。余程の事が無い限り、あの女は俺に対する優先順位を上げたりしないさ」

『余程の事って、例えば？』

「そうだな。能力者事件に巻き込まれたり、かな？」

『・・・今更だけど、本当に貴方が敵じゃなくて良かったわ』

「それは何より」

俺が話した真実を思い出すのは彼女が能力者事件に巻き込まれるような『当事者』になる事が条件になる。そして当事者になった以

上、俺が話す事に躊躇を憶えなくて済むし、これ以上頭を絞る必要も無い訳だ。

俺と館社鏡美の関係は、少なくとも彼女が条件を満たすまでは白紙になったと考えて良かった。

### 第三章

新装備のテストを終えて俺は通常の生活へと戻っていた。

俺にとつての通常の生活　　気ままに散歩をしていると不意に眼鏡とピアスに同時に連絡が入った。

『上！上！』  
『！？』

しかも緊急事態報告！

俺の体は即座に反応して地面に転がり回る！今まで幾度と無く救われてきたパターンなので考えるよりも体が先に反応したともいえる。

転がって身をかわした瞬間、俺が今で居た場所に何かが無数に着弾してコンクリートで出来た地面を抉りこむ。

「何だ、こりゃ！？」

『わからない。視界射程範囲外からの攻撃よ』

『こちらも聴域範囲外です。ただ真上から唐突に現れたわ』

「上？」

思わず見上げるとなにやら光るものが無数に　　。

「あれってまさか・・・」

『避けて！！』

「マジかよ！？」

上空から降ってくる無数の弾丸を確認して俺は慌てて逃げ出す。  
<sup>リバースコア</sup>反転結界を使って跳ね返せない物ではなさそうだが、どのくらいの量と時間が必要なのかわからないまま散弾の嵐の中に飛び出すほど無謀で居られない。

「分析！分析はどうなってるんだ？」

『無茶を言わないで！300メートル以上上空から高速で降ってくる弾丸の特定なんて即座に出来る訳ないでしょう！』

「役立たず！」

俺は走って逃げながら涙目になって叫んだ。配慮の無い発言とは思ったけど、そんな事に構っている余裕も無い。

『せめて射撃手の位置がわかれば良いのだけど300メートル以内に居ると思えないわ』

「逃げ回るしかないって事かよ！」

分析班の二人が即座に分らないと言うのだから時間を稼ぐ為に逃げ回るしか出来ない。

しかし逃げ回るにしても限界がある。咄嗟に公園に入ったは良いもののせめて上からの攻撃が防げる屋根がほしいところだ。

「屋根？」

自分の発言にふと思い当たる。

空から降ってきてキラキラ光る無数の弾丸。

「雨が！」

『え？』

「雨。多分天候を操る能力者だ。射撃位置は雲から恐らく雷を降らせているんだ」

『でも、この速度は・・・』

「数千メートル上空の雲から雷の形状と大きさを操作しているんだ。巨大な弾丸の形状の雷を作れば不可能じゃない」

『なるほど』

そうと分かれば対策は立てられる。

「テンペスト！」

『任せて。こちらの位置から貴方に降りかからない位置を検索するわ』

俺の位置からの射程距離は300メートルだがテンペスト本人からの射程はこの街全域をカバーして余りある。たとえ上空数千メートルだろうと問題にならない。

「ついでにこっちの位置を双眼鏡か何かで覗いている奴を探してくれ。そいつが能力者だ」

『了解』

テンペストの技能を考えれば二つのことを同時に頼んでも問題ない。そのくらいには俺の相棒は有能だった。

『検索完了。ここから南に600メートルの位置にあるビルの屋上に居るわ。そこまでの安全な道もナビゲートするわ』

「頼むぞ、相棒」

俺はテンペストに指示された安全な道を辿りながら敵対能力者の下へと向かう。

『リバース。このまま直線で向かって相手にはこちらの位置がバレバレよ。どうするつもり？』

「今対策を立てる」

俺はビルの位置を確認しながら携帯電話を取り出して電話を掛ける。

「俺だ。今からいう位置に向かって屋上に居る人間を監視してくれ。監視だ。深追いはするなよ」

『わかりました』

俺は素直に返事を返す電話相手に満足してビルへと急ぐ事にした。

俺の接近には当然気づいていたはずだから敵対能力者は逃げ出すかと思っていたが相手はビルの屋上から俺を見下ろしていた。

「余裕か？そっちはどうだ？」

『背後を取りました。気付かれては居ないようです。攻撃しますか？』

「ふむ」

この位置からあまりよく見えないが敵対者は男。

「よし。撃て」

『はい』

俺の指示と同時にビルの屋上から俺を見下ろしていた敵対能力者の背後から青白い炎が直撃して敵対者がバランスを崩し、屋上から滑り落ちる。

『落ちてしまいましたね』

「良くやった。後で褒美やるぞ」

『期待していますね』

そういつて彼女　玉藻は嬉しそうに笑った。彼女はこの時間、良く近くを散歩しているのだ。

一方、ビルの屋上から落下した敵対者は最初驚愕していたのかジタバタ暴れていたが直ぐに体勢を立て直して　。

「なんだ、あれ？」

『水蒸気みたいね』

敵対者の体から唐突に霧のような物が噴出して敵対者の落下速度がグンと落ちた。

「どういう原理だ？」

『多分水蒸気を利用してプールに飛び込むように落下速度を落としているのよ。咄嗟にあの濃度の水蒸気を作るなんて大した能力者だわ』

「ふ〜ん」

能力者としては格上かもしれないが玉藻の不意打ちにあっさり引つかかる辺り戦闘者としてはあまり優秀とは思えない。

そんな分析をしながら俺は速度を落として振ってくる敵対能力者を地上で待ち受けた。

「仲間が居たか。噂どおり姑息な男だ」

余裕で地面に着地したそいつは尊大な態度で俺を睨みながら語りかけてくる。

「で？お前誰？」

屋上に居たところを見たときは良く分からなかったがスーツを着たサラリーマンみたいな男だ。他に特徴らしき特徴も見当たらない。

「お前の敵だ」

しかし見た目の割に敵意は満点だ。男は焦げたスーツからペットボトルを取り出すとふたを開けてひっくり返す。中に入っていたのは水のようなだが、それは地面に落ちる事無く空中で凍りつき　鋭

い氷の杭を作り出した。

「・・・」

嫌な展開。嫌なのは氷の弾丸となる物を作り出されて事ではなく、氷の杭が宙に浮いて固定されていると言う事。

この状態は男の何らかの能力で氷の杭が男の制御下にあると言う事だ。

リバースコア  
反転結界は飛んでくる弾丸を方向、速度、軌道までも正確に跳ね返す事が出来るが相手の制御下にあると言うなら話は別だ。跳ね返した瞬間に跳ね返された以上の力で打ち込まれれば反転結界は突破を許す。

「お前の力、見せてもらう」

そんな俺の思惑を知ってか男は容赦なく氷の杭を俺に向けて解き放った。

「撃て」

そして俺も同時に耳に当てていた携帯電話に指示を出す。

「！」

青白い炎　玉藻の狐火が俺に迫る氷の杭に命中して蒸発して水蒸気を撒き散らす。

俺とは相性が悪いと言うなら他に仲間借力を借りればいいだけの話だ。幸い玉藻の狐火は氷とは相性が良い。

「ち！姑息な」

更に打ち込まれる玉藻の狐火に舌打ちを漏らして分が悪いと踏んだのか俺を睨みながら背を向けて撤退を始めた。

「追跡しますか？」

ビルの屋上で待機していた玉藻が俺の傍へと駆け寄ってくる。

「それは専門家に任せよう」

俺や玉藻が追跡するよりもテンペストやゴールドに頼った方が確実と言う物だ。

「それじゃ私達はどうします？」

「ご褒美をやると言っただろう？今からデートしよう」

「え？」

玉藻は驚いていたようだが俺が肩を抱き寄せるとあっさりと身を任せてもたれ掛かってきた。楽しいデートになりそうだ。

世界でもっとも希少な能力者とは何か？

希少とは言ってもある意味で言えば世界でもっとも人数の居る能力者とも表現できる存在。

一言で言えば『予知能力者』がそれに当たる。

数が多いと言つのは世界中に存在する占い師、預言者という奴も予知能力者に含まれてしまうからだ。たとえ偽者であったとしても本人以外に真偽を確かめるすべが無い以上、偽者と判断する事は出来ない。

そして世界でも数えるほどしか居ない『本物』の予知能力者が居る。

俺の妹　淡雪だ。

「くそ」

俺　天候を操る能力『クラウドオオメーション気象予告』の能力者は苦渋を飲んでいた。リバーズ。あの男と対峙した事で生まれて始めて味わう苦渋を味わっていた。基本的に能力者という奴は自分の能力に絶対の自信を持つ。特にその能力が強ければ強いほどその傾向が強くなる。

そういった能力者ほど自分の能力を使って敵を撃破しようとするのだが。

「あの男！」

あの男　リバーズはその法則を一切無視して真つ先に仲間に助けを求めた。そもそもアイツは最初から普通じゃなかった。俺の襲撃を咄嗟に回避した事なら驚くほどではないが、その後即座に俺の能力を解析、後に的確に俺の元へと接近してきた。

だからこそ俺は一对一の対決を予想して待ちうけたというのに奴の初撃は仲間からの援護攻撃だった。

能力者が自分の能力を積極的に使うのは自分の力を試してみたいと言う欲求が強いからだ。

なのに、あの男は。

「既に能力者としての自分を見極めているか、それとも自分の能力に興味が無いか」

どちらにしても厄介や奴だ。

「くそ」

もう一度悪態をついて俺は病室へと脚を向けた。

淡雪は予知能力者だ。

それは不変の未来をみるというものではなく変更可能な予知だ。

名を『エンジェルサレイク天輪偽装』と言う。

これは非常に便利な能力だ。

都合の良い予知ならば見送れば良いし都合が悪ければ変えれば良い。そんな便利な能力だったからこそ淡雪の能力は魅力的だった。

しかし淡雪の能力にはリスクがあった。本人すら知らなかった絶望的なリスクが。

予知を使えば使うほどに生命力を消費する。

それが淡雪の能力のリスク。

最悪なのは本人すら知らなかったと言う事で、その事実が明るみに出たときには既に淡雪は手遅れになっていた。

状況が明るみに出たのは淡雪が所属していた能力実験施設での事だった。

淡雪は俺とは違って生まれながらの能力者。非常に希少ではあるが能力者というものが生まれる可能性がある以上、零ではないわけで淡雪はその本当に希少な能力者だった。

その為に幼少の頃から淡雪はその筋では有名だった。

「・・・ち」

嫌な事を思い出して思わず病室の廊下の壁を叩く。

そう。淡雪は有名で、その為幼少の身から能力者施設に通う事になり。数年で能力を頻繁に使いすぎて淡雪のリスクが判明した。最悪なのは、その能力施設がろくでもない連中で構成されていた事。

リスクが判明してからも淡雪は能力を使う事を強要され。結果、ボロボロの廃人になるまで使い尽くされた。

俺が事態に気づいた時には既に手遅れだった。俺は別の能力者施設に通って能力者として覚醒していた為、淡雪を能力者施設から引き離す事には成功したが。

「・・・」

俺と淡雪が逃亡する為にも更に多くの能力を淡雪に使わせる必要があった。

残り3回。

それが淡雪に残された能力使用限界数。そして3回を使い尽くせば。淡雪は死ぬ。

断っておくが生命力と寿命には綿密な繋がりはない。

生命力が半分になるのが4分の1になるのが、その気になれば100歳まで生きられる。本当に『その気』になれば、だが。

生命力という奴は寿命ではなく『耐性』にこそ効力を発揮する。

つまり生命力が希薄になった淡雪は病気などに対する耐性が恐ろしく低い。たとえ常人がなんでもないような風邪でさせ淡雪がかかれば命にかかわる。

つまり、そういう事なのだが限界まで生命力をすり減らした淡雪はそれ以前に生きる為の活力が足りていない。

そんな事をつらつらと考えつつも淡雪の病室の前へとたどり着く。「？」

珍しい事に淡雪の病室からは淡雪の笑い声が漏れていた。何か良い事でもあったのかと俺は病室の扉をノックしてから部屋へ入る。

「いらっしゃい。兄さん」

「淡雪、何か良い事でも・・・」

俺の言葉が途中で途切れる。淡雪の横たわるベッドの傍の椅子に腰掛けた『そいつ』を目にして。

「貴様・・・！」

「お邪魔してるよ。『お兄さん』」

「！」

リバース。昨日仕留め損ねた男がそこに居た。

「あの人、兄さんの知り合い？楽しい人ね」

「・・・」

リバースが病室を去った後、俺は自分を殺したいほどの後悔に襲われていた。迂闊だった。あいつが俺の存在を感知した時点で俺は即座に撤退するべきだったのだ。間違ってもあの男と顔を合わせるべきではなかった。

恐らく探查系の能力者の助力を得て俺を追跡していたのだ。

そして俺の身元を調べあげ淡雪の元まで辿りついた。

「ち！」

これでもうリバースは俺に対して絶対的に優位に立ったといつても良い。淡雪は病室から動かせない。つまりリバースはいつでも淡雪を人質にとれる立場にあると言う事。

対して俺はリバースの事を依頼人を通してしか知らない。

そう。依頼人だ。

俺の目的はリバースを殺す事ではなくリバースを殺してくれと言う依頼を達成する事。必要なのは依頼を達成して報酬を貰う事なのだ。

淡雪を延命させる為には莫大な金がかかる。

その為に俺はどうしても金が必要だったのだ。

「兄さん？」

「ああ。別になんでもない。あいつは・・・ちょっとした知り合いだ」

「そうなんだ」

微笑む淡雪。けれど生命力を枯渇させた淡雪の姿は酷い物だった。昔は綺麗だった髪も腫もくすんで肌は荒れ放題。視力を初めとして五感のほとんどが非常に弱くなっている。

「また来てくれるかな？」

「ああ。多分な」

俺は忌々しく思いながら淡雪の見せる久しぶりの笑顔に何かを救われたような気分になっていた。

リバーズはちよくちよく淡雪の病室に現れるようになった。

本当に忌々しい。忌々しいが 淡雪はよく笑うようになった。

淡雪が笑うようになってくれたのは嬉しいが俺は気が狂うほどわけの分からない感情に囚われていた。

リバーズが来ない日、俺が淡雪の病室に入ったら淡雪が瞳を輝かせて俺を見て 俺だとわかると途端に意気消沈した。

「いらつしゃい。兄さん」

そして作り笑顔で俺を出迎えた。

そんなに そんなにあいつが来るのを楽しみにしていたのか？  
実の兄である俺ではなくあいつのことが、そんなに！

俺は自分が感じている感情が嫉妬である事にやっと気付いた。

「くそ」

俺は淡雪の気持ちがあいつに向くのが面白くないのだ。

今まで俺だけが淡雪の傍に居て、そして俺だけが淡雪を守ってきた。なのに淡雪は俺ではなくあいつに心を許そうとしている。その事実が俺は気に入らなかった。

それを醜い感情だと自覚しても俺の心を掻き乱してどうしようもなく心を乱した。

状況が変化したのは更に数日たったある日。

今日はリバーズが来ない。あいつは来る時は事前に連絡をしてく

る。よりもよって俺の持つ携帯に。どうやって番号を調べやがったのか。

「淡雪。入るぞ、淡雪？」

俺が淡雪の病室に入ると淡雪は呆然と佇んで、そしてポロポロと涙を流していた。

「ど、どうした？」

「酷い。こんな・・・どうして。信じられない」

「？」

淡雪の言葉が意味不明だ。何か良くない事でも。

「！」

その瞬間、淡雪の事情を俺は察した。

「まさかお前・・・予知を！」

「ごめんなさい」

「何故だ！もうお前には予知を使う余裕も必要もないのに！」

「・・・」

ああ。畜生。分かっているさ。淡雪は決して誰かに強要されて予知を使った訳じゃない。彼女は単純に知りたかったただけなのだ。リバーズの事を。

そして出た結果は恐らく最悪の物だったのだろう。

「もう。あいつには関わるな」

「・・・うん」

正直、淡雪が素直に頷いてくれたのは意外だった。けれど安堵もしていた。これでまた淡雪を俺が独占する事が出来る。

けれど事態は全く好転しなかった。

まるで俺の事情を察したかのようにリバーズの足は淡雪の病室から遠ざかった。否、まるでではなく本当にこちらの事情を察していたのだろう。

「卑怯者め」

そう悪態が付くが現状は好転しない。淡雪の容態が良くない。

「あんな奴の為に予知を使うから」

本当は関係ない。淡雪の生命力は既に限界だ。3度と言ったが一度でも二度でも結局淡雪の生命力が枯渇して限界なのは同じ事。

つまり淡雪の容態が悪いのは彼女の気持ちの問題と言う事になる。リバースに会えないから彼女は意気消沈して生きようという気力が喪失している。

端的に言ってしまうえばそういう事だ。

「あの男、どこまでも俺の邪魔を」

でも本当は気付いている。淡雪はリバースと出会う前の状態に戻っただけ。リバースの喪失という事実を目を瞑れば結局何も変わっていない。あの男には出来たのに俺には何も出来ないのだ。

「畜生」

俺は病室の前でなんとか息を整えて　なるべく笑顔で淡雪の病室へと入った。

「淡雪、今日は・・・」

そして凍りつく。

「淡雪？」

淡雪が病室から姿を消していた。

手掛かりは直ぐに見つかった。

恐らくは淡雪が残したメモ。そこに街外れの倉庫街の住所と倉庫番号が記されていた。

当然、俺は急行する事になる。

そして辿り着いた時、全ては手遅れになっていた。

「何故だ、淡雪」

俺が倉庫に入った時、淡雪は仰向けに倒れていて男　リバースに抱きかかえられていた。俺は手に持っていた氷の剣を床にカランと落とす。

「何故だ？」

「これで・・・良いの」

淡雪にはまだ息があつた。そして俺の問いかけに答えた訳ではないだろうが必死に声を張り上げていた。

「これで・・・私の見た未来は変えられる」

「そうだな」

答えたのはリバーズ。

「三度目の予知を使いきつたお前は死ぬ」

「！」

分かっていたのに背筋が凍る。恐らく一度目はリバーズの未来を。二度目はここに来るまでの道筋を。そして今　三度目の予知を使い切つたのだろう。

「後悔は・・・してないわ。これでもう兄さんに迷惑を掛けなくて・・・すむ」

「・・・」

そんな。そんな事は望んでいない。お前は俺に迷惑かけても良いんだ！

そう思った。

けれど淡雪の達成感のある顔を見ていたら、そんな事は言えなくなった。生まれて初めて自分の意思で予知を使い、生まれて初めて自らの望みを叶えた。そんな淡雪に『余計な事をするな』とは言えなかった。

死へのカウンドダウンが始まっていた淡雪は恐らく初恋の相手であるリバーズの腕の中で息絶える。それが多分淡雪が望んだ理想の終わり方。

だから俺は動けなかった。

「満足か？」

だが、この男は違った。

「最後の最後に華を咲かせた。それだけでお前の人生は満足だったか？」

「ええ。満足よ」

勿論、淡雪の声には迷いはなかった。

「そうか」

そしてリバーは淡雪の頭にそつと手を当てる。

「なら俺が褒めてやるよ。良くやったな、淡雪」

その一言が決定的だった。畜生。

「あ」

俺は知らなかったが淡雪には『誰かに褒められたい』と言う願望があった。本来生まれながらにして予知能力者であった淡雪ならその願望は望むがままだった筈なのに逆に予知能力者として上手く立ち回れる事が出来なかった子供には人に褒められた経験が皆無に近かった。

だから瓦解する。

「う・・・ああ！」

満足気だった表情が崩れ、呻き、自らの頭に載せられたリバーズの手を取って必死に手繰り寄せる。

「嫌」

最初はそんな小さな声。

「嫌。嫌なの！」

それはある意味当たり前。。

「私、死にたくない！まだ、まだ沢山やりたい事があるの！もっと、もっと話したい事が沢山あるの！」

当たり前前の醜い生への渴望。

「死にたくない！死にたくないよ！」

「そうか。なら・・・」

そして、そんな亡者が絶対に逆らえない。。

「俺がお前に最高の呪いをプレゼントしてやるよ」

甘い甘い誘惑。

そして淡雪にその誘惑を振り切る力は既になく必死で奴の手を握り締める。

「さあ。分かっているだろう？お前の理想の自分を思い浮かべろ。お前は本当はどんな自分になりたかった？どんな道を歩みたかった？」

「・・・」

淡雪は何処までも必死だった。

そして本当に死の直前になってそのイメージが固まったのだろう。

淡雪はリバースに視線だけで頷いて見せた。

「そのイメージを死んでも手放すな！」

「はい。はい！」

そして薄暗い倉庫に光が満ちた。

「・・・」

眩しすぎる光が収まって再び目を開くと状況が少しだけ変わっていた。

「淡雪？」

リバースの手の中に居た筈の淡雪が居なくなっていた。存在した痕跡さえも残さず綺麗に居なくなっていた。

「淡雪は何処だ？」

「死んだ」

「！」

端的に答えられた声に俺は自分でも恐ろしくなるほどの激情を覚えた。

「嘘だ！さっきの光は何だ？お前は何かをした筈だ！」

「どんなの優れた能力者だろうと覆らない定理がある」

「黙れ！淡雪は何処だ！」

「死んだ人間は生き返らない」

「！」

聞きたくない。聞きたくない。聞きたくない。

「お前の妹、淡雪は死んだ」

「黙れえ！！！」

俺は激昂して本来は使わない自分の体から水分を抽出して周囲に水の杭を作り上げる。気象を操ると言っても俺ができる事は雲と風を操る事に過ぎない。

既に存在する雲からなら雹を作り出して弾丸のようにして落とす事も出来る。この距離は約5千メートル。能力者の中でも相当に広い射程だ。

だが自分の周囲の水を雲へと変換して集束し、風で急速に冷やす事で氷を作り出し操作する。その作業の射程は僅かに10メートル。言ってしまうえば俺は気象を操る事に特化した念動力者だった。

「もう貴様は喋るな！死・・・ね？」

激昂して氷の杭を撃ち出そうとした俺は背後から衝撃を受けて自分の腹から生えた物を呆然と見下ろす。

俺が先ほど落とした氷の剣が腹から生えていた。

「・・・」

納得する。まだリバーズには仲間が居て俺がリバーズを攻撃しようとしたから俺が落とした剣を拾って背後から攻撃してきた。

だからどうした？

もはや、俺の寿命が100年だろうと10分だろうと関係ない。命ある限り俺はリバーズを殺す為に。

「ごめんね。兄さん」

「・・・」

瓦解した。

淡雪がリバーズの言葉によって瓦解したのと同じように俺はその背後から聞こえてきた声によって瓦解した。

激情は去り、そして何かに納得するような形で俺は崩れるように前のめりに倒れる。

「あ。ああ」

そして血を撒き散らしながら背後を振り返った俺の目に望んで居た者が映る。

くすんで居た髪と瞳は輝きを取り戻し、肌は潤いを取り戻し、そ

して何より生命力に満ちた目を俺に向けてくる『淡雪の姿』。

「何・・・故？」

「ごめんなさい。兄さん」

別に淡雪を攻めた訳ではない。俺が知りたかったのは。

「リバーエンペラー転生皇帝。死の間際に理想の自分の思い描く事により理想の自分

として生まれ変わる事が出来る能力。他人に使うのは初めてだがな」

そう。淡雪が何故活きているのかという事。

「淡雪を生き返らせるのは不可能ではなかったのか？」

「生き返った訳じゃない。理想の自分として生まれ変わっただけだ」

出血多量の頭では何が違うのか分からなかったがきつと何かが違

うのだろう。後知りたい事は。

「呪いとは何の事だ？」

「これだけの能力だ。当然莫大なりリスクが存在する。10人の人間

の死を目撃し、その生命を横取りする事によりリバーエンペラー転生皇帝の発動エネ

ルギーが確保される。言ってしまうえば10人の人間を犠牲にして初

めて1人の人間を転生させるエネルギーを確保出来るのさ」

「責様・・・！」

それは問答無用で淡雪に10人分の人生の責任を負わせるという

事だ。この男がどう思っているか知らないが淡雪は決して自分の他

人を犠牲にしたいなどと思いは。

「お前の妹は全てを知った上で全てを受け入れた。自分が生き残る

為に他人の命を道具とすることが是とした訳だ」

「・・・」

畜生と思う。やはりどんな事情があろうとも俺はこの男とだけは

仲良く出来そうもない。失神寸前の頭でもこれほど殺したいと思う

のだから。

殺してやる。殺してやる。

お前には 殺してやりたいほど感謝してやる。

結果として俺は死ななかった。

「・・・」

淡雪に刺された俺は出血多量ではあったが致命傷ではなかった。その上で失神した俺は直ぐに倉庫の外に待機してあった医療班によって応急処置をされて、そのまま病院に運び込まれた。

迅速すぎる対応によって俺は意図も簡単に命を繋ぎとめた訳だ。それでも数日は入院する必要があったがお陰で考える時間が出た。

まず淡雪が俺を刺した理由。

それは単純に俺を助ける為だった。あの場面で淡雪が俺を刺さなければ俺は確実に死んでいた。冷静さを何よりも必要とする能力者の戦いで激昂して我を忘れた俺がリバーズに叶う訳もなかったし、例えばリバーズが俺を見逃したとしても俺に未来などなかった。

淡雪が俺を説得するという手もあったが淡雪がそれを選ばなかった以上、その選択でも俺に未来はなかったのだから。

何故ならリバーズがその結果を望んでいたからだ。

淡雪が俺を刺して止める。それこそがリバーズの望んだ結果。理由は恐らく俺と淡雪の間に禍根を残す為だ。例え俺と助ける為とは言え淡雪は実際に俺を刺した。その事実が淡雪を蝕み 結果、俺と顔を合わせる事に罪悪感に苛まされるだろう。

だから今後、俺が直接淡雪に会いに行くという行動はNGになった訳だ。

自分と自分の隣にいる淡雪の傍を俺がうるちよろし無いように釘を刺す為に淡雪に俺を刺させた。冗談抜きである男はそれ以外の目的無しでそれを実行させたのだ。

数日の入院と検査が終わり退院の日。

最後の検査が終わり病室へと荷物を取りに戻った俺は直ぐに『それ』に気付いた。病室を出る時はなかった見舞いのように置かれた小さな紙袋。

中に入っていたのは携帯電話だった。

「・・・」  
少しだけ調べてみると送り主の存在は直ぐに知れた。アドレスが一件だけ存在しリバースの名前が登録されていたからだ。そして奴の住所も同じく記載されていた。

淡雪に会う訳には行かない俺は勿論リバースの近くにいく事さえも忌諱とした。

しかし俺はどうしても淡雪の状況を知りたかった。

だから記された住所の建物から少し離れた位置に存在するビルの屋上へとやってきた。

間抜けだが買ってきた双眼鏡でリバースの住居を除き見るという手段を行使した。

「・・・」

淡雪は直ぐに見つかった。

リバースと何やら言い合いをしていて、どうやら喧嘩の最中のようだった。言葉までは聞き取れないが怒りに顔を染める淡雪は幸せそうだった。

「ち」

正直に見るんじゃないかなと思ったと思う。例え喧嘩という負の方面の行動をしてさえも淡雪が幸せに見えるという事は俺が如何に淡雪を幸せに出来ていなかったのかという証明。

その事実には苛立つ俺の懐で電話の音が鳴り響く。

俺の携帯電話ではなくリバースから送られた方の電話。一瞬リバースからかと思ったが双眼鏡で覗くリバースは未だに淡雪と言い争いの真つ最中だった。

「・・・」

電話の表示は不通知。怪しいと思ったが結局俺は電話に出る事にした。

『初めまして。略称としてクラウドと呼んでもよろしいかしら?』

「好きにしる」

電話の相手は女だった。

「それで貴様は何者だ？」

「それは言えません。言えない事情があり言わない事が私の役目でもあります」

「！」

唐突に理解が走る。リバーズの所属する組織 巷ではアポカリプスと呼ばれる組織。その指導者は何もかもが不明とされていた。名前、性別、年齢、所在地。全てがだ。

この電話の相手はその指導者ではないかと直感的に思った。自分の素性を明かさず秘密を守る事 それこそがアポカリプスの指導者の最高の仕事だからだ。

その秘密主義のアポカリプスの指導者が

「俺に何の用だ？」

「私からは特に用はありません。貴方の方から何か質問があるなら受け付けようと思ってお電話差し上げました」

「・・・」

事後処理ということか。随分と親切なものだ。

「淡雪はこれからどうなる？」

「彼女にはコードネームが与えられました。『フェイク』。それが今後彼女の名前となりリバーズの元で暮らす事になるでしょう」

「そんな事は聞いていない。淡雪の予知で何をするのかと聞いているんだ」

「私からは特に何も」

「？」

「勘違いしているようだから言っておきますが彼女は私の標的ではありません。私の今回の標的は彼女を利用しようとするくだらない野望をもった研究者達です」

「・・・」

「結果としてリバーズはフェイクに接触しましたが、それは私の指示ではありません。そして察していただけだと思いますがフェイク

を手に入れたのはリバースの独断であり私の意志ではありません』

「勝手な行動をした奴への処罰は？」

『ありません。何より私の今回の指示は、そういう研究者が存在すると伝えただけですから。彼らをどうしろという指示すらしていません』

「では研究者どもはどうなった？」

『リバースが皆殺しにしました』

「！」

やっと俺の頭に理解が追いついてきた。

この女は言っている。自分はリバースに行動の指針を示しただけで命令という行動を起こしていないと。行動はリバースが勝手に起こしたものであり彼女は直接的な関わりはないと。

「勝手な女だな」

『ええ。私もそう思いますが困った事にリバースは私の最大の賛同者なのです』

「ち！」

忌々しいが、それは事実だろう。この女とリバースの間には利害一致という名の完全な信頼関係が築かれている。俺がどうこう言う問題ではなかった。

「質問を変えよう。リバースは淡雪をどうするつもりだ？」

『予知能力込みという話なら恐らくリバースはそんな物には全く興味を持っていないでしょう。断言します』

「何？」

『リバースはね。釣りが好きなんですよ』

「は？」

全く関係のない話に移行したのかと間抜けな声が出てしまった。

『リバースは人が大事にしている物や大切にされている者、更には貴重で希少な物が大好きで、そんな物が人の手にあると横取りしたくなる困った性格の人なのです』

「・・・」

『貴方があんまりにもフェイクを大切にしているのを見てリバーはフェイクを貴方から横取りしたくて堪らなくなったのでしょ』  
『もう一度聞く。淡雪はどうなる？』

『ご心配なく。リバーは釣りの大好きな人ですが釣った魚に餌をあげるのも大好きな人ですから。そして一度釣った魚を手放すような人ではありません』

「ち」

横取り対象となった淡雪は横取りが終了した後でも十分対象内だと言っことか。

「予知能力は本当に使わせないという事だな？」

『少なくとも私が指示するという事はありません。彼女の自由意志やりバーすがどうしても必要となって要請する事に応える事はあると思います、多くとも年に数回といった所でしょ』

「・・・」

『他に聞きたい事は？』

「何故俺にこの電話を渡してきた？」

『便利かと思ひまして』

「俺に何をさせる気だ？」

『特に何も。私が貴方に何かを指示する必要性を感じませんので』

「・・・」

『他に質問は？』

「ない」

『それではごきげんよう』

そしてあっさり通話は切れた。

通話の切れた電話を手を持ったまま俺はもう一度淡雪の居る方向へ双眼鏡を向ける。どんな偶然なのかさっきまで喧嘩をしていた淡雪はリバーに抱き寄せられていて 唇を奪われてしがみ付いていた。

「・・・」

ああ。思う。もう俺が淡雪に傍に居てしてやれる事は何も無いの

だという事を。傍に居て淡雪を幸せにするのはもうあの男の役目なのだ。

「畜生！！」

手に持った携帯電話をコンクリートの床に思い切り叩きつける。それだけであっさり壊れる携帯電話をそれでも気がすまなくて力の限り踏みつける。何度も。

「はあ。はあ。はあ。」

荒い息で木っ端微塵になった携帯電話を眺めぎゅっと拳を握り締める。

「分かっているぞ」

俺がやるべきことなど既に決まっている。

淡雪を護る。

それだけは今までと何一つ変わらない。

あの女が俺に何一つ要請を出さなかったのは簡単な理屈だ。あの女自身が言ったとおり必要が無かったからだ。

これから俺は淡雪を守る為に帆走する。淡雪を守るという事は必然的にリバースとリバースの周辺を守る事になる。その為には1人では駄目で俺は勝手に自分の手駒となる兵隊を集めて組織する必要がある。

俺が勝手にそうすると分かりきっていたから、あの女は俺に何も指示しなかった。

「良いだろう。踊らされてやる。淡雪を守る為ならいくらでもな」  
踵を返した俺の目に映ったのはいつの間にか屋上の扉の前に置かれた真新しい携帯電話。何処までも癪に障る連中だ。俺の行動などお見通しという訳か。

電話を拾いあげた瞬間に着信音が響き渡る。

電話の表示はリバース。

『よお。出齒亀野郎』

電話に出ると真っ先にそう言われた。俺の所在などバレバレというわけだ。

「今は貴様に淡雪を預けておいてやる。だがもし淡雪を泣かせるような事をしたら・・・」

『阿呆か、お前は。それは俺の台詞だ』

「何？」

『フェイクを泣かせて良いのは世界中で俺だけだ。泣かせる事も怒らせる事も悲しませる事も俺にだけ許された特権だ。もし俺以外の奴がフェイクにそんな真似をしゃがったら俺はそいつの存在を問答無用で抹消してやる』

「・・・」

『俺の女を自由にして良いのは俺だけだ。分かったか？』

畜生と。心の中だけで叫ぶ。

『ああ。それと言い忘れたらしいが資金提供くらいはしてくれろそつだ。せいぜい利用するんだな』

そして通話は切れた。資金提供とはあの女からの伝言だろう。

俺はもう一度携帯電話を床に叩き付けたい衝動に駆られたがギリギリのところまで自重した。何度壊そうとも結果は同じだからだ。

「そういう事か」

あの女とリバースの狙いをやっつと看破する。

要するに奴らは外部に戦力が欲しかったのだ。たつた電話一本しかラインの通っていない、しかも絶対に裏切れない外部の組織。

俺と俺の作る組織が何らかの理由で瓦解した時、俺が真っ先にやる事は携帯電話を破壊する事だ。先ほど少し思ったがこの携帯電話は非常に脆い。まるで壊される事を前提に作られているようだと思つたが、事実その通りだった訳だ。

この携帯電話さえ壊せば俺とリバースの繋がりは消え、そしてリバースの組織との繋がりも一切出てこない。

なんとも奴らに都合の良い組織ではないか。

一言文句でも言つてやろうと俺は携帯電話に登録されたりリバースの番号を表示させようとして 凍りつく。

「ここまでやるとはな」

この携帯電話にはリバースの番号の他にもう一つだけ登録された番号があった。

『フェイク』

本物なのか偽者なのか分からない。そして俺には確かめる術も無い。俺が淡雪に電話を掛ける事などあつてはならない。

そして確かめる術がない以上、これは本物と価値が相違ない。

つまり俺は何が何でもこの携帯電話を誰かに奪われる訳にはいかなかった訳だ。淡雪を登録してあるのはそれ以外の意図はない。

俺に完璧な鎖を付けたという訳だ。

「ち！」

まずはこの携帯を繋ぐ本当の鎖を買って、それから俺にリバースの抹殺を依頼した馬鹿どもを皆殺しにする事から始めよう。

『上手くいったみたいね』

「ああ」

俺はクラウの出て行った屋上で尋ねてきたゴールドに同意を示す。「単純な奴で助かるな」

俺はクラウがこの場所に来る以前からここに居てクラウが去るまですっと同じ場所にたたずんでいた。

勿論、クラウの持つ携帯に電話を掛けたのもゴールドじゃない。

女版の俺がゴールドの真似をして掛けていたのだ。

着信音や話し声がクラウに届かなかったり、俺がこの場所に居るのに気付かなかったのは簡単なトリック。

「ご苦労さん」

「・・・いえ」

振動を操る能力者バイブルの協力があれば音の伝わる振動を近くに居るクラウの所まで届かせる事なくカット出来るしテンペストが居れば風景を誤魔化すなど楽勝だ。

更にクラウドが見た俺と淡雪の姿も偽者だ。というかクラウドの携帯に登録した住所すら本当の物ではない。偽者の住所にテンペストが作った幻影を映し出した。結局すべて俺の演出だった訳だ。

ちなみに本物の淡雪はテンペストの演出通りに振舞えるような状態ではない。未だにクラウドを刺した自責に苛まされて元気がない。後で慰めておかないと。

『それにしても危なかったわね』

テンペストの言うとおり今回の俺達はかなり危ない橋を渡る羽目になった。危なかったのはクラウドが俺。正確には男の俺をリバースと認識して襲ってきた事。

基本、俺は表と裏で顔を使い分けている。表では男、裏では女として活躍している。その男の俺に対して正面からリバースとして認識して襲ってきたクラウドは本当に厄介な相手だった。

「クラウドの依頼人は恐らく本部の残党だろうな」

依頼人本人達に自覚はなかったのだろう。俺の正体を知っていたにも拘らずそれを公表する事もなかった。しかし俺はその勘違いに甘える訳には行かなかった。

だからこそクラウドを仲間に取り込む工作を施して依頼人達を始末する必要があったわけだ。

つまり今回の事に関してだけ言えば俺の作戦ターゲットは淡雪ではなくクラウドだったわけだ。淡雪は本当に本気でおまけ。

ちなみに当初の作戦では淡雪にリバースエンペラー転生皇帝を使う事すら予定されていなかった。正確には使う『ふり』で誤魔化して淡雪にはご臨終してもらおう手筈だった。演出上の話で言えばテンペストさえ居れば十分可能だったし。

予定を変更した理由は二つ。

一つはリバースエンペラー転生皇帝の実験をしておきたかったからだ。ある程度確信はしていたもののリバースエンペラー転生皇帝が他人にも有効である事を確認しておきたかったし、その実験をする為のターゲットとして淡雪はうってつけの存在だった。

ちなみに転生皇帝を他人に使う場合は普段俺がストックしているうちの二つを同時に使う必要があったらしい。俺自身に使う分には消費ストックは1だが他人に使う場合には消費は2になるといふこと。

お陰でセシリアを宥めるのに苦労した。

二つ目の理由は簡単な話で、俺が淡雪を本当に欲しくなったから。電話で言ったがクラウが本当に淡雪を大切にすぎているから本当の本気で欲しくなって途中で予定を変更してしまった訳だ。勿論テンペストが大反対したけど。

「ま。今回の功労者はエアーズで決まりだな」

『後でご褒美くださいね』

「勿論。期待しててくれ」

『ぼっ』

今回のエアーズの活躍は広範囲に渡る。

先ずクラウの痕跡を辿ってから依頼者達の大まかな特定、結局絞り込む事が出来なかった為に四六時中特定範囲から出る情報を的確に取捨選択して操作してくれていたのだ。俺の情報が外に漏れないようにずっと神経を尖らせて監視してくれていた訳だ。

ある意味地味だが一番骨を折ってくれたエアーズの期待には応えなくては。

「それじゃ帰るとするか」

俺は傍に佇むバイブルと対面のマンションで待機していたテンペストに合図して撤退する事にした。

### 第三章（後書き）

本当なら第三章と第四章に分けたかったのですが区切りがつかない  
だったので一つに纏めて公開することになりました。

## 第四章

なんだかんだ言っただけで淡雪　　フェイクの世話は結構手間が掛かって楽しかった。

ちなみにフェイクというのは俺が電話中に咄嗟に淡雪の為に考えた物で正確にはまだゴールドに認定して貰っていない唯のニツクネームに過ぎない。

まあ俺が呼ぶ分には問題なからう。

「うう」

「こら。いつまでもイジイジしないでこっちに来て」

「でも」

この通りフェイクはずっと自責の念に駆られてちつとも外出しようとしないう。折角健康な身体を手に入れたというのに宝の持ち腐れだ。

ちなみに俺の部屋は住人でいっぱいだった為に彼女にはエアーズと同居して貰っている。本当に功労者はエアーズだわ。

「口答えするなっつての」

「あいた」

フェイクにデコピンしてやると額を赤くした彼女はちよつと涙目でウルウルと俺を見上げてくる。

う。可愛い。

思わず抱きしめて頭をナデナデ。

「は。いかん。甘やかしに着たんじゃなかった」

フェイクは今までずっと過保護に育てられた為か非常に甘え上手だった。しかも彼女は予知能力にばかり頼っていたので能力以外には何も出来ない。家事に関して他に関しても無能も良い所だった。「と、兎に角折角健康な身体を手に入れたんだから何か有意義な事

をしないと」

「有意義な事って、例えば？」

「料理とか？」

「料理・・・」

フェイクは暫くブツブツ考えていたが意を決して立ち上がるとガツツポーズを取って叫んだ。

「やってみます！」

「・・・」

進めておいてなんだが凄く不安だ。

勿論、俺の予感はずれてくれなかった。

「リバーズ！リバーズ！出来ました！」

「お〜」

意気揚々と飛び込んでくるフェイクに俺は元氣なく手を上げてヨレヨレと答える。ちなみにテンペストに膝枕して貰って胸には子狐形態の玉藻と人間形態のミタマを寄りかからせているがフェイクは一切を無視して飛び込んできた。

「今日は上手く行きました！見てください。焦げてないでしょ？」

「・・・そうだね」

フェイクが作っているのはクッキーらしい。腕前は本人が自爆する通りはかなり低い。

「そ、それじゃ今日も・・・」

「あ〜」

テンペストに膝枕されたまま俺は口を開けるとフェイクはオズオズしながら俺の口にクッキーを運んで放り込んだ。

齧る　ちよつと硬すぎ。煎餅より噛み砕くのに苦勞するクッキー。味わう　何故かしよっぱい。塩と砂糖を間違えたと言つより両方入れている。形状　みていないけど多分見なくて正解。

「40点」

「え〜」

俺の傍にしゃがみ込んだフェイクは不満の声を上げる。ひよつとして自信でもあったつもりか？

「ま。でも昨日よりはマシになってる。頑張ったな」

「あ」

俺が頭を撫でてやるとパツと嬉しそうに顔を輝かせて笑顔になる。

彼女が褒められたがっているのは知っていたが想像以上に単純だ。

「私もつと頑張るね」

「お。いつか俺を唸らせる物を作ってくれ」

「うん」

意気揚々と台所に引つ込むフェイクを笑顔で見送り。

「凄いわね」

テンペストがポツリと感想を漏らした。

「何が？」

「全部。これだけ毎日クッキーを食べさせられているのに良く飽きないなあとか、毎日違った褒め言葉を良く考え付くなあとか」

「前半に関してはやせ我慢。後半に関しては得意分野だ」

「やっぱりね」

いくらなんでも毎日クッキー（失敗作）を食わされるのは超きつい。けど実際にフェイクが立ち直るきっかけになったのだから文句を言うのはもつと元気になってからにしよう。

「でも実際フェイクの腕は日に日に上がってるし」

「亀より遅い進歩だけどね」

フェイクがクッキーを作り始めてから既に2週間。一度も大成功がないのはある意味凄いとしか言えない。何でマイナス方面にしか褒める所がないのだろう？

「クラウって実は凄い人だったのかもね」

「んにゃ。可愛いのは可愛いんだよ。フェイクは異常なほどに保護欲を刺激するし。あんなのが妹だったら過保護になって当然だな。

あいて」

調子に乗った俺が口を滑らせるとテンペストが俺の耳をひっぱる。

勿論わざとだけど。こうやって嫉妬するテンペストも悪くない。

### 女だらけの祭り

「買い物？」

「ええ。フェイクつて即席で着たから碌な着替え持ってないじゃない。だから買い物に行こうと思ってね」

「へえ〜」

気のない返事を返すリバーズ。

まあ前に女版のリバーズを連れて行って散々着せ替え人形代わりにしたから仕方がないか。

「それじゃ行くのは私とフェイクと・・・」

「私も行きます」

参加表明をあげたのは意外にもエアーズだった。

「良いの？」

「良いんじゃない？フェイクが一緒なら多分問題ないだろう」

フェイクが一緒なら？

「ああ。そう言う事ね」

フェイクが一緒ならクラウが影ながら護衛に入る。それなら私たちも安全だといいたいのだろう。

「リバーズは着てくれないの？」

「大人しく留守番してる」

頭に玉藻を乗せながらリバーズは自堕落な回答を返してきた。残念。

「白と黒つてどっちが好き？」

『エアーズとフェイクなら白、テンペストならどっちでも良い』

エアーズとフェイクに向けた質問だったのに何故か一番に回答してきたのはリバーズだった。確かに眼鏡に質問は送っていたけど即答だった。

「何を選んでいるのか分かっていて答えているの？」

『下着だろ？』

「……」

正解だったので思わず沈黙してしまふ。

『エアーズとフェイクは細身だからな。流石に黒は似合わない。テンペストなら清楚系も誘惑系もどっちでもいけるさ』

「……それって褒めてるのよね？」

『勿論』

またも即答のリバーズ。つられて二人 エアーズとフェイクの方へ視線を向けて彼女達のスタイルを観察してしまふ。

確かにスタイルという点では私が一番だろう。

フェイクは言うに及ばず、エアーズは私より少しだけ年上の筈だが彼女はスレンダーな体系なのであまりお色気担当という感じではない。

「なんだか失礼な事考えてませんか？」

「別に」

意外に鋭いエアーズに指摘されるが惚けてみる。

「別に良いですけどね。それにスタイルという点なら女版のリバーズが一番だと思いますけどね」

「……」

そういえばそうだった。確かに『3人の中でなら』私が一番だけど女版のリバーズはあらゆる意味で反則の女だった。

「あれは反則よねえ」

「ええ。全くです」

「??？」

唯一フェイクだけが頭に？マークを浮かべていたけれど私とエアーズは盛大なため息をついていた。

買い物の中休みとして喫茶店で休憩する事にした。する事にしたのだが。

「美味しい〜 これ、とっても美味しいですねえ〜」

大きなパフェを前にフェイクが舌鼓を打っていた。

「良かったわね」

対して私とエアーズの前には珈琲。言うまでもなくブラック。

「お二人は食べないんですか？とっても美味しいですよ」

「遠慮しておくわ」

「私も甘い物はちょっと」

本当は大好きだけどね！私も、多分エアーズも甘い物は大好きだけど大好きだからこそ抑えるときは抑えないと。間違ってもリバーに太ったなんて思われたら自殺してしまう！

「そうなんですかあ〜。残念ですねえ〜」

そんな私たちを尻目にパクパク食べるフェイク。

「あまり食べ過ぎると太るわよ？」

「あ。大丈夫です。私今まで全く甘い物食べてなかったので体重が普通よりかなり低いんです。だから沢山食べて栄養つけないと」

「・・・」

もし憎しみで人が殺せたならきつと私とエアーズはフェイクを殺していた。きつと。おまけに、こんなときに限ってリバーは空気を読んで会話に割り込んでこないし！

「楽しそうですね」

「え？」

そんな私たちに割って入ってきた救世主は意外なことに意外な人物だった。

「ゴールド？」

金髪の少女　ゴールド。私たちの組織の指導者だ。

「何でここに？」

「リバーに誘われました。たまには私も息抜きをさせてこいと」

「リバーらしいといえはらしいけど、良いの？こんなおおっぴらに動いて」

「私もそう思ったのですが、そういっただらリバーに自意識過剰だ

と笑われました」

「なるほどね」

確かにリバーズなら言いそうだ。

「まあ、実際息抜きはほしいと思っただけだね。やってみて実感しますが指導者などやるものではないですね」

「そんなに大変なの？」

「逆です。やることが何もなくして退屈な事この上ありません。その癖、正体だけはバレてはいけないって言うのだから」

「なるほど。リバーズがやりたがらないわけだわ」

退屈ならドンと来いのリバーズだがゴールドの抱えるような退屈はもつとも嫌う類の物だろう。

「それにしても良く化けたわね」

私の視線はゴールド ではなく隣のバイブルに向けられる。

「流石にメイド服では目立ちすぎますから。もつとも『これ』だけは手放せませんが」

そう言っただけで竹刀袋に包まれた物 恐らく刀を示すバイブル。

「まあ、折角だから一緒にお茶しましょうか」

「ご好意に甘えさせていただきます」

そうして私たちは店員に頼んで少し広めにテーブルへと場所を移す事にした。

「そういえば・・・」

ゴールド達と合流して話で盛り上がっていた時、ふと前から気になっただけの事をたずねてみようという気になった。

「バイブルの真名って何なの？」

「このメンバーの中で唯一バイブルだけ真名を明かしていなかった・・・」

「今更隠しても意味はないでしょう。腕輪の制約もない事だし任せるわ」

自分のことなのに何故かゴールドに視線を送って了解を取るバイ

ブル。よく賤られてるなあ。」

「略称でよく勘違いされるのですが私のバイブルという呼び名は振動のバイブレーションから取られた物ではありません」

「違うの？」

「もつと単純に考えていただければ私の真名も予想がつくのでは？」  
「あ」

言われて直ぐに気づく。振動を操る能力者だからという事で否定もされていないのに素直な表現に騙されていた。

「つまり貴方の真名は・・・」

バイブレーションバイブル  
「振動聖典。振動ではなく聖典・・・聖書から取られたのが略称です」

「なるほどねえ」  
すつかり騙されていた。

「でも、これで一応全員の真名が知れ渡ったわけね」

ミラー・ジーン・ベスト    ゴールデンイヤーズ    バイブレーションバイブル    エアーズ・シグナル    エンジェル・エイク  
「鏡界天主」    「黄金聴域」    「振動聖典」    「微風信号」    「天輪偽装」。

良くも揃った物だ。

「あ。今のうちに断っておきますが私の真名は嘘ですので」  
「え？」

感心していた私に水を差してきたのはエアーズだった。

「でも貴方以前リバースに真名を呼ばれて・・・」

「一族出身の私がわざわざ本部に真名を提出すると思いませんか？リバースの言う事を聞いていた事を含めて全て演出です」

「私たちにも教える気はないの？」

「ええ。私が『これ』をつけている理由をご存知ですか？」

そう言つて右腕の手首に装着された物    腕輪を指し示すエアーズ。

「そういえば今更よね。外したいならリバースに言えば外してくれるだろうし」

「これは私が神剣を参考に改良を施した特別製なんです。なので外そうと思えば普通に外せまですし記憶に介入してくるような無粋な機

能は削除してあります」

「何かつけていて得なことでもあるの？」

「平たく言えば神剣の代用といったところです。流石に他の腕輪に介入出来るほどの力はありませんが装着者の能力を増幅する作用としては十分ですから」

「へえ」

納得したけれど一つ疑問が残る。

「それ。私達は使えないの？」

「使う事は出来ますがリバーズに相談した結果却下されました」

「？」

「まあ、それが私の真名を貴方たちに告げる事が出来ない原因という事です。ある機能だけは封印も削除も出来なかった物ですから」

「それって・・・」

「ええ。腕輪をつけている状態で真名を呼ばれると逆らえなくなる機能は健在なのです」

それは確かにリバーズなら反対する訳だわ。最悪私達が誰とも知らない奴の言いなりになってしまふ可能性があるのだから。

「それじゃ貴方の真名って誰も知らないの？」

「ええ。ゴーストは勿論のこと一族の長にすら教えていません。もつとも約一名には伝えてありますが」

「あゝ。でも別にリバーズは知ってても呼ばないでしょ」

「そうでもないですよ。二人っきりの時は良く真名で命令されますし」

「え？」

あのリバーズが自分の女に対して強制命令権を？

「まあ、仕事なんて無粋な要件で命令を受けた事は一度もありませんけど」

「・・・」

得意そつに胸を反らすエアーズの反応をみて沸き起こった疑問は直ちに解消された。つまりエアーズが喜ぶから命令している訳か。

つまり特に意味はないということ。

「それにしても豪華な面子ですね。女ばかりとはいえ、この面子なら小さな組織程度なら互角に戦えそうです」

「まあね。だからこそリバー・スは私達の外出を許可したんだろうし」  
「？」

感心したようなフェイクの言葉に私は冷静に言葉を返した。フェイクは理解が追いついていないようだけど。

「リバー・スにとって私達・・・特にテンペストは特別なのです。だから彼女が外出するときは強力な護衛が必ずつく事になっているんです」

「特別？」

「ええ。貴方やエアーズはリバー・スに『横取り』されてきた対象ですがテンペストだけは違います。彼女だけはリバー・スが横取りした人材ではなく彼女自身が選択した結果としてリバー・スの傍にいる。それ故に彼女はリバー・スにとって特別な存在なのです」

「特別と言っても特別えこひいきされている訳じゃないけどね」

「はあ」

困惑気味のフェイク。ま、特別扱いされていないというのは嘘だけどね。

フェイクは『特別』の言葉に意識が行ってしまったようだが私が特別扱いされている証拠である『強力な護衛』という部分を聞き逃していた。

私にとっての強力な護衛というのは言うまでもなく玉藻とセシリアだった。

私が外出するとき昼間は玉藻が、夜はセシリアが最低限一緒でなくってはリバー・スは外出を許可してくれない。無論、玉藻やセシリアもその事実には気付いているが、その事実を前にしてもリバー・スに逆らえないくらいには彼女達はリバー・スにメロメロな訳だ。

ちなみにこれは玉藻やセシリアも知らない筈の事だが、リバー・ス

が玉藻やセシリアを横取りしてきた背景には恐らく私の護衛にする為の目的があった。

そのくらいには私はリバーズに特別扱いされているのだ。

「でも、それなら何でリバーズは私なんかを欲しがったんですか？」  
『欲しかったからよ』

私、ゴールド、エアーズの声が重なってフェイクに答える。

「貴方が自分のことをどう思っているのか知らないけれど、少なくともリバーズが欲しがってくれるくらいには貴方は魅力的だったのよ。私にはリバーズの考えを全て理解する事は出来ないけれど貴方を欲しがった理由なら明確に説明できる。リバーズは貴方の能力や有用性を見越していたのではなく、純粹に貴方が欲しかったの。だから貴方を是が非でも手に入れようと画策した」

「・・・」

「こういうと個人的には複雑な気分なんだけど、これだけは間違いないわ。リバーズは貴方が好きだから手に入れたの。他に理由なんてないわ」

エアーズの説明で沈黙したフェイクに私は少しだけ注釈をつける。

「私ってひょっとして・・・」

「？」

「自分で思っているより幸せなのかも」

そう言っただけ頬を染めるフェイクは　なるほど。確かに可愛いわ。やっとりバーズがこの子に構う理由が納得できた気がする。

「主様。何か良い事ありましたか？」

「ちよつと、な」

俺は玉藻とミタマを侍らせながらエアーズから送られてくる情報に少しだけ顔をほころばせていた。テンペストとゴールドからの情報ではないのは単に彼女達は都合の良い情報しか俺に流してこない

からだ。

その点エアーズが所持しているのは俺と相互通信用のマイクとスピーカーなので全ての会話が丸々聞こえてくる。

そんなこんなで俺はちよつと良い気分で両隣の玉藻とミタマを抱き寄せて。

「・・・」

無粋な携帯電話の着信音に興を削がれた。

「誰だ、良い所で」

無然として携帯電話の表示を見るとあまり歓迎しない名前が点灯していた。

「少しは空気読めよな、あの女」

それでも出ない訳には行かない相手なので俺は渋々通話ボタンを押して携帯電話を耳に当てる。

「はいはい。もしもし？」

『半澤祐樹。今時間はありますか？』

「・・・出来ればだったら過ぎたい午後な今日この頃」

電話の相手は館社鏡美。本人の話では俺が前に通っていた高校の生徒会長なのだとか言う女。

『それなら貴方に少し相談があります。以前に出会った公園に着な

さい』

「相談ねえ〜」

世間話ではなく相談。気まぐれとは思えないので間違いない『何か』あったのだろう。少なくともこの女が俺に興味を再発するような何かがある。

「時間は？」

『私は既に公園に居ます。出来るなら今すぐに』

「二時間後に行く」

そう言っただけ俺は相手の返事を聞かずに通話を切った。

さて。すこしばかり面倒な事になりそうだなと。

## エピソード

出かける前に俺がまずやるべき事は気は進まないがテンペスト達に事情を説明して協力を求める事だった。

「状況は理解出来ているな？」

「私はね」

「十分だ。お前からテンペストとエアーズに説明して即刻マンションに戻ってくれ」

向こう側でこちらの状況が理解できているのはゴールドのみ。テンペストはあくまで「目」を使う能力者である為、携帯電話との相性が悪い。スピーカーから漏れる音を拾う事は出来ないのだ。

エアーズは俺の携帯電話をハッキングして音声を拾う事は可能だろうが外出中の携帯装備でそれをやれというのは酷というものだ。

そういう訳で俺の携帯電話の会話から事情を理解できたのは音を拾うスペシャリストのゴールドのみと言うわけだ。

「それは構わないけれど私達がそちらに戻るには二時間以上掛かりますわよ？」

「それも問題ない。お前達なら移動しながらでも俺をサポート出来るだろう？」

「それはそうですが、安全面という点では私の屋敷の方が確実にありませんか？」

「まだ日が出ている。セシリアには少し遅れて着てもらってからこちらの方が安全面は上だ。それにわざわざお前の拠点をクラウに漏らす事はないだろう」

「なるほど。了解しました」

別にクラウが信用出来ない訳ではないが伝える必要がない情報を伝える事はない。

「エアーズ。ゴーストに協力要請を申請してくれ」

『ゴーストですか？彼の現在位置を考えると到着は二時間どころか五時間近く掛かります。最悪今の仕事を放棄する結果となり無駄足になりますよ？』

「構わない。無駄足になるなら無駄足にさせれば良い。最悪なのは最悪の事態に奴の助力が間に合わない事態だ。今受け持っている案件くらいの放棄は最重要じゃない」

『了解しました』

ゴールドとエアーズに必要連絡を終えてから俺は更に携帯電話でクラウドに協力要請を出す。

『そこまでの事態なの？今出せるうちの最大戦力じゃない』

「撒いた火種の度合いにもよるが用心を怠って痛い目を見るよりは良い」

『火種？』

「後で教えてやるよ」

疑問を訂して来るテンペストには悪いが説明するのは後で良い。

俺は準備を優先する為に奥の部屋 セシリアの寝室へと急ぐ。

暗い部屋の中、中央に置かれた棺桶がシユールだが俺は迷う事無く棺桶の蓋を開いて中で眠る美女の顔をそつと撫でる。

「・・・お出かけですか？」

「ああ。お前の力が必要だ。日が沈んだら合流してくれ」

「分かりました」

再度目を閉じかけるセシリアをそつと抱き上げて唇を重ねる。

「我慢出来なくなりますよ？」

最近のセシリアは定期的に血を与えているので安定しているが俺と接触しすぎると吸血衝動があふれ出してしまう。

「後でたっぷりご褒美をあげるからな」

「期待しますよ？」

「勿論だ」

「」

蕩けるような笑顔を見せるセシリアを横たえて俺はそつと棺を閉じた。

全ての準備を整え公園の入口に辿り着いた時にはすでに約束の間を10分ほど過ぎていた。

「さてと。鬼が出るか蛇が出るか」

『えらく厄介な火種を蒔いたわねえ』

『今後は一言相談してからにしてくださいね。私にまで秘密で事を進めていたなんて少し意地悪が過ぎます』

「ヒントは出ていただろう？気付かないお前の洞察力の問題さ」

悔しがるゴールドには悪いが流石にそろそろ時間だ。俺はゆっくりと公園の中へと足を踏み出した。

## エピローグ（後書き）

本来なら第五章で終わるシリーズなのですが第三章でページ数を使い過ぎた為、第四章+エピローグで第五巻は終了になります。第六巻はただ今執筆中ですのでしばらくお待ちを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6911j/>

---

反転・遊戯 - リバース・ゲーム - 5 (仮) 上

2010年10月8日14時41分発行